

ものういも
支援ある

2-GA通信

2007年(平成19年)8月1日(水曜日)(第68号)

石川工具研磨製作所

静岡市 沼津市

再研磨からエンドミル主体 に新作工具づくり本格化へ

現状は再研7割、新作3割の比率

営業技術を担当する

石川直明氏



創業者である石川正次社長は部品メーカーに勤めていた頃、外注していた工具再研の出来栄えに不満を覚え「もつと切れる再研工具を作りたい」との信念で独立、起業した。

受注の7割を占める再研の工具種は、超硬エンドミル(ボール、スクエア、ラフィニングなど)が8〜9割とほとんどを占め、あとはドリル、カッタから成る。取引企業は全国数百家、新作を含め月産2万本体制を採る。

「オペレーターのトレーニングが5月に終了し、軌道に乗り始めておおよそ3ヶ月が経過したが、もつと早く導入していれば良かったと思う。例えば、30度の不当分割も難なくできるし、アリ溝カッタの製作でも従来機で溝を切ったあと、外

が説明する。将来的には「新品工具の販売に力を入れていきたい」「そんな路線転換」を本格化させるに当たって、ワルター製工具研削盤「ヘリトロニック・パワー」を今年の1月に導入した。

工具の再研磨で実績を積み重ね、新作工具メーカーを志向している。静岡県沼津市に生産拠点を擁する石川工具研磨製作所もその1例に数えられる。

自社ブランドや直需、流通を介しての特殊工具の受注が3割まで占めるようになり、工具メーカーの顔を持ち始めた。だが、昭和58年に工具再研事業をスタートさせ、来年には4半世紀を迎える同社は、再研業界のバイオニア的存在と言ってもいい。今でこそ省資源の発想が定着し、リグラインド事業は活況を呈しているものの「創業10年」を超える再研業社は100社にも満たない。

「工具の製造に着手したのはおよそ10年前からだが、現状は自動車向けのアリ溝カッタ、総型カッタ、段付きドリルなどの特殊工具や自社ブランドではエンドミルを製作している」と創業者の息子が担当する石川直明氏

ヘリパワー導入で特殊工具づくりが格段にスピードアップ



ワルターユーザーザイア訪問

周刃を汎用機でやり、また、底刃とラジラスをNC機でという工程分割を余儀なくされたが、ワルター機ならワンチャックで可能だからだ」

ローダーを付けて1日18時間稼働させている。「意外とトラブルもない。海外機にしては、と驚いている」とメンテナンス面でも好評価を下す。1ヶ月、何百本とある自動車ユーザー向けの特殊工具づくりを主に担っている。ワルター機なら、営業所開設の計画がすでに持ち上がっている。

来年には工場を移転、新築の計画

「しかし、営業所開設に先行して工場移転を計画している。静岡県の経営革新事業の一環に関わり、来年には移転が具体化すると思う」

新作が再研に回ってくるとも多い。20数年に及ぶ再研の実績は、容易に再研の比率を落としそうにない。

再研磨の詳細に触れると、工具種はボール、スクエア、ラフィニング、テーパ、ラジラス、ハイヘリックスの各エンドミルを筆頭に、バニシングドリル、サイドカッター、Tスロットカッター、面取りミル・カッター、リーマ、タップ、ドリルなど。他に段付き、テーパ、ボール、コーナーなどの追加工も手がける。標準納期は7日間。再研磨後のコーティングは7日から14日間とする。

営業業務は石川氏を含めて4人。再研を含まない

ワルター製「ヘリトロニックパワー」を1月に導入

特殊工具製作のスピードアップのほか精度向上にも寄与

「不当分割も難なくクリア、アリ溝カッタはワンチャックで対応可能」(石川直明氏)

商社との同行PRでエンジニアリング的アドバイスも実践

「現在、取引している流通業者さんは、再研磨に非常に熱心で、同行PRでよく客先を訪問する。その際、刃型形状そのものの提案のほか、ワークによってどんなコーティングとの組み合わせがいいか、現場を見ながらエンジニアリング業務にまで関わるようにしている」

営業業務は石川氏を含めて4人。再研を含まない